

大阪天満宮を中心とした天神祭の領域と天満のコミュニティ

大阪府 健康医療部 保険医療室 健康づくり課 辨野 真理
大阪府立大学大学院 人間社会システム科学研究科 下村 泰彦

1. はじめに

大阪の天神祭は、京都の祇園祭、東京の神田祭と並ぶ日本三大祭の一つである。約1ヶ月にわたって行われる天神祭のうち、ラストを飾る7月24日の宵宮・25日の本宮が有名である。陸渡御・船渡御が行われ、奉納花火が打ち上げられる25日には、延べ130万人が来場する。ここでの渡御とは、御神霊が鳳輦や神輿に乗って大阪天満宮の氏地を巡ることであり、特に船渡御の存在は「水の都」である大阪の特性ともいえる。1000年以上の歴史をもつ天神祭は中断の期間はあるながらも、観光資源であるだけでなく地域文化を継承する場でもあり、各町や地域で異なるデザインの提灯や、注連縄、幔幕などの装飾等により、天神祭期間中は祝祭空間として氏地内の一体感が創出されてきた。

しかし、天神祭を存続させていくための課題も出てきている。経済的な面では、大阪に本社を構える企業の減少等を要因とした協賛企業の減少傾向による赤字がある。一方、祭そのものを支える組織と各組織を支えるコミュニティの継承が課題となっている。大阪天満宮は氏地内の地域コミュニティからなる組織と大阪全体に広がりをもつ氏地外の組織との両方に支えられてきた。さらに、「講」および「講社」と呼ばれる組織が、天神祭において渡御行列に参加する等の奉仕活動を行ってきた。講には、氏地内の地域コミュニティ「地縁」で結束するものと、同業者や会社の結びつき「社縁」により結束するものとの2タイプが存在する。その中でも、地縁により結束する講は旧町割における町会や、複数の町会が集まったコミュニティが基になっている。氏地では定住人口が増加傾向にあるが、地縁の講に所属する新規構成員は増加しておらず、講の総数も現在は減少傾向にある。さらに、現在の町割とは異なる旧町名の町会の参加者自体の減少もあり担い手不足となっている。

既往研究をみると、藍谷ら¹⁾は四都市における阿波踊りの比較から都市空間利用と運営方法の特徴と課題を探り、祝祭空間に関して都市構造や人の動きとの関連性を論じている。また、藤井ら²⁾は伝統行事「京都五山送り火」の形態と祭祀組織の関連性を保存会への聞き取り調査から捉え、伝統行事の継承について探っている。しかし、これらの研究は祝祭空間において、祭やイベントとの関わりに差があることに関しては論じられていない。また、氏地の広がりや、社寺の可視領域、祝祭空間に訪れた人の景観に対する認識等については全く触れられていない。

そこで、本研究では天神祭を対象に、大阪天満宮を中心とした祭が影響を及ぼす領域の範囲や重なりを捉えるとともに、祭を支えるコミュニティについて探ることにより、祭の持続可能性について考察する。

2. 研究方法

まず、大阪天満宮の影響圏域を「祭の領域」とし、氏地・祭会場・可視領域・認識領域の4要素に視点をあて、各領域の広がりや相違から捉えることとした。氏地は、祭時期に掲げられる提灯を氏地の判断基準として、文献等とヒアリング調査(H28.12)により過去と現在の領域を捉えた。祭会場は、提灯・注連縄等の物的装飾や行宮祭、陸渡御・船渡御のルート、花火打上位置や交通規制、観覧席や出店の位置を資料・文献及び図上と現地調査(H28.10)から捉えた。可視領域は、現地調査により、境内の施設や樹木等の視認可能な範囲を地図上にプロットした結果から捉えた。認識領域は、まち歩き参加者(13名)へのアンケート調査(H28.7)による「祭らしさ」の景観要素及び観光・歴史資源分布状況から捉えた。次いで、コミュニティについては、「講」の1つ鳳講(H28.11)と大阪天満宮(H28.12)へのヒアリング調査を通じて、祭を支える組織や組織の構成員から捉えた。

3. 祭の領域

(1) 歴史的背景

現在の天神祭は渡御行列を組み、天満宮を出発し(陸渡御)、大川を行き来し(船渡御)、陸に上がり宮入する。起源は大阪天満宮が天曆5(951)年から毎年「夏越の祓」として、鉦流神事を行ったことにあるとされている。大川に鉦を流し、流れ着いた先を御旅所として、船渡御の目的地とする神事であり、これが天神祭に繋がった³⁾。江戸時代初期の寛永末～慶安2(1644～1649)年に初めて御旅所の位置が固定される。位置を固定したことで鉦流神事は中断となり、毎年御旅所の位置が変わらなくなった。結果、船渡御のコースも固定される。初めて固定した御旅所に接する形で、大阪三大市場である雑候場魚市場が移転され、この御旅所は「雑候場の御旅所」と称されるようになる。その後、寛文八(1668)年頃に御旅所の位置が、木津川右岸の戎島(現西区本田梅元町)に変更される。図1に示した江戸時代の船渡御コースが雑候場御旅所、戎島御旅所までのコースである。戎島の御旅所の付近が、明治新政府により外国人居留地の川口居留地として造成されるようになる。明治5(1872)年に松島へ御旅所が転宮される。コースは図1の明治14年～昭和12年の船・陸渡御コースである。松島御旅所への船渡御行列は昭和13年～23(1938～1948)年まで太平洋戦争の影響で中止される。昭和24(1949)年に船渡御を復活しようとするが、地盤沈下により橋が川の水面に近づいたことで船の航行に支障をきたした。昭和28(1953)年には、現在の大川を遡行し、Uターンするコー

スとなる(図1の現在の陸・船渡御コース)⁴⁾。よって現在までに位置は2度、ルートも3度変更されたこととなる。

(2) 氏地の領域

図1の色の塗っている範囲が「大阪夏祭提灯考」⁵⁾から捉えた江戸～昭和にかけての過去の氏地の範囲である。江戸時代は大阪天満宮の門前を除くと、当時の大川を下る船渡御コース沿い及び御旅所周辺に氏地があった。現在は、雑候場の御旅所付近や戎島御旅所付近は氏地とはされておらず、飛び地としては千代崎の行宮付近のみが残っている。このことから、渡御のコースと氏地の領域には大きな関わりがあると分かる。江戸時代以降の固定化された御旅所周辺を氏地として取り込み、天神祭によって大阪天満宮は周辺住民との結びつきを強めたのである。千代崎の行宮とは、松島御旅所周辺にたてなおされた御旅所であり、毎年宵宮に行宮祭が行われている。また、現在の氏地領域は過去の氏地領域と比べると、船渡御ルート沿いである大阪天満宮の東部と、町奉行同心・与力の居住区であった北部に広がっている。明治12(1879)年～昭和12(1937)年まで、北新地・堂島付近まで陸渡御が行われていたことから、現在でも堂島付近は大阪天満宮の氏地となっている。

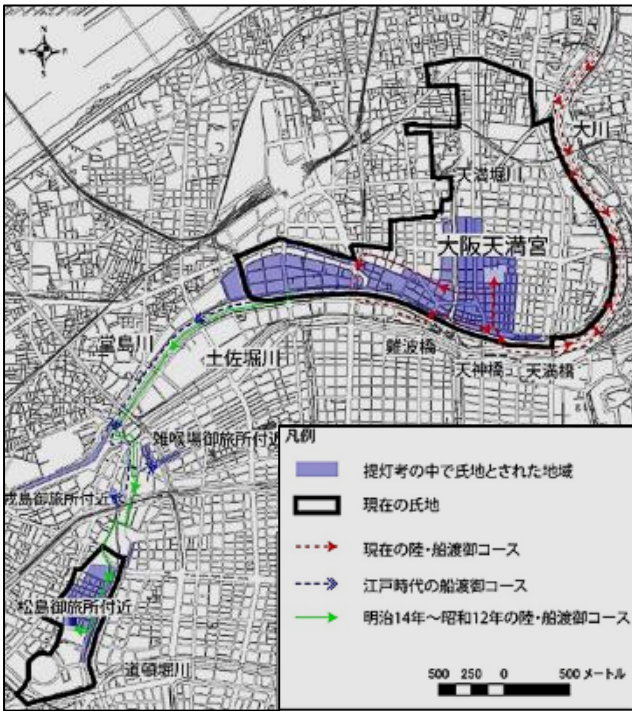


図1 渡御コースと氏地の変遷

(3) 祭会場

祝祭空間として祭への連帯感を創出する物的装飾は、大阪天満宮境内、陸・船渡御コース及び行宮付近で行われる。人の動きは主に交通規制が行われる大阪天満宮周辺と南部及び花火が見えて露店の並ぶ大川沿い、さらに天神橋筋商店街で発生する(図3)。源八橋・都島橋等の船渡御の際に通過する全7本の橋上は奉納花火や船渡御が見える、天神祭において貴重な視点場となっている。提灯、幔幕、注連縄以外にも、花火を含め光の演出が多く見られ、船上で篝

火をたく篝船や、川の水面を照らす衛士篝の設置、橋のライトアップなどが行われている。

(4) 可視領域

可視領域は南北の通りと東西の筋で構成される短冊型の町割の影響と、周囲の2階建～中・高層の都市化により、大阪天満宮から東西南北方向の道路上約350m～400m程度の広がりである(図3)。大門がある南にやや可視領域が広がっているものの、方位による大きな差は確認できなかった。大阪天満宮の南には、陸渡御の際に通過する大鳥居が存在し、可視領域を東西に延ばしている。氏地・祭会場と比較すると、非常に狭く、大阪天満宮の日常的な視覚的影響範囲は狭いことが分かった。



図2 大阪天満宮の可視領域

(5) 認識領域・現在の祭の領域

認識領域では、景観要素としての回答者への影響強度を5段階評価してもらい、その平均点を評価点として、大阪天満宮付近で景観において印象深いとされる要素を探った。結果、最も「祭らしい」と感じる景観要素は評価点4.92点の提灯であった。天神祭において、提灯はほぼ陸渡御コース沿いのみ設置されていた。観光資源と比較すると、歴史的資源の認知度は低かった。図2中の丸は認知度が10以上であった資源の位置を示している。「キッズプラザ大阪」・「天満天神繁昌亭」・「八軒家浜」等、認知度の高い資源はほぼ天神橋筋商店街沿いに分布していた。また、観光資源・歴史的資源の認知度も大阪天満宮北部では低い等、領域による差が確認された。

各領域の重なる、現在の主要な祭の領域は、大阪天満宮から南の大川の間及び大川沿い、天神橋筋商店街といった地域であり、4要素から捉えた最も大阪天満宮からの影響が強い領域であった。一方、大阪天満宮からの影響が弱く、祭の領域と認識され辛い場所は、重なりが氏地のみである大阪天満宮北部及び西部の堂島、千代崎の行宮付近の3地域であった。また、主要な祭の領域は時代により変遷しており、大阪天満宮北部・堂島・千代崎には、大阪天満宮からの影響が弱くなり祭の領域でなくなる可能性もあるため、氏地内における今後の天神祭を支える組織を考える上で、



図3 現在の大阪天満宮を中心とした祭の領域

重要な地域であると考えられる。

4. 天神祭を支える人々の実態

(1) 講

大阪天満宮に対して奉仕を行う地縁及び同業の縁や社縁を基に組織化した団体である。講には講元と呼ばれる各講を束ねるトップが存在し、自主的に運営されている。天神祭などでは、講同士の連絡や情報共有が必要となるため、昭和50(1975)年に天神祭講社連合会という組織が形成された。2016年度講社連合会に加盟している講は25講あり、天神祭に参加を表明し奉仕を行ったのは24講である。江戸時代頃に盛んに結成され、現在まで存続している講は8講である⁶⁾。時代と共に消失・復活・新設が繰り返され、特に同業者で結成された講でその傾向が強い。また、講名だけを引きつぎ、支持母体が変わる例もある。ここでは、地縁の講である鳳講について詳述する。鳳講は、「菅南」と呼ばれる大阪天満宮南部の旧町割の町会8町に住む氏子集団である。鳳神輿を受け継ぎ管理しており、渡御の際にはその運搬を行う。所属人数は、1年を通して活動する講員が38名、鳳神輿を昇く「昇き手役員」が26名、さらに「浴衣役員」と呼ばれる菅南地区在住の年配の協力者が加わり、合計約70名である。所属者の平均年齢は約50歳である。特定の家筋や世襲制での加入ではなく、菅南地区在住者や町会加入者が天神祭に参加しなければならないという強制圧力はほぼ無い。鳳講では運営員会の開催が定められており、委員には10の役職がある。役職についている人数は兼任2名を除き36名である。役職を組織図化したものが、図

4である。運営員会では、講として判断が必要なこと、天神祭に関する事項、会計報告などが話し合われる。図5は、鳳講における大阪天満宮・菅南連合八町会(菅南地域社会福祉協議会)・新規参入者・氏地外に人との関わりを示したものである。点線矢印がお金の流れ、矢印が人の動きである。この図から、財政面について捉える。鳳講の財源はご祝儀と各町分担金、輿丁と呼ばれる神輿の担ぎ手の参加費、客船でのチケット販売と寄付金、グッズの売上である。ご祝儀とは、氏地内在住の個人からの寄付金を指す。各町分担金とは、旧町割の各町会の町会費から募金として支払われる資金を指す。ご祝儀の際、「大阪締め」とも言われる「手打ち」を行うことが多い。支出面は、主に神輿の修繕費や船渡御の際の船のレンタル代金である。他の講との関わりとしては、西天満小学校の児童が参加する講である天神講獅子がある。天神講獅子は女性も参加して、獅子舞や傘踊り等を披露するため、菅南地区の女性や子供は天神講獅子に所属する場合も多い。子供の場合、成長すると他の講に所属することもある。また、御鳳輦講は菅原町を中心とする乾物商を営む同業者の縁が基で構成されている団体であり、鳳講とは支持母体の一部が重なることとなる。よって、鳳講の役職と御鳳輦講の講員を兼任する人や、鳳講から御鳳輦講に講を移す人もいる。

(2) 地域のコミュニティ

大阪市北区は、菅南地区のような各町をまとめた地域が19存在し、そのうち18の地域で連合会が存在する。菅南地域社会福祉協議会や菅南連合振興町会、菅南連合八町会と呼ばれ方は様々だが、同じものを指す。よって、地縁によるコミュニティは各町会、菅南連合八町会、鳳講と多層構造で存在している。菅南連合八町会には、各町会長や菅南地区における婦人部や、青少年部、子供会、民選委員、防犯委員などの代表者が集まる。婦人部や青少年部は、各町会単位ではなく菅南連合八町会が担っており、子供会はさらに広い校区の単位で活動が行われている。鳳講は、菅南連合八町会の中に、他の委員のように「鳳講常任委員」として席が存在することで、連合町会内に組み込まれている。これにより、菅南地区在住の人に鳳講からの協力の要請や呼びかけができる。また、図4のグレーの部分は、鳳講運営委員会における菅南連合八町会関係者であり、各町会長等は鳳講の運営に対して意見ができる権利がある。しかし、菅南連合八町会と鳳講の構成員は必ずしも一致しておらず、連合町会の会長と鳳講の講元は兼任でなくとも良い。よって、菅南連合八町会に参加していなければ鳳講の講員になれる訳ではない。

(3) 氏地外からの参加者

氏地外から天神祭を支える参加者としては、鳳講の場合は神輿の担ぎ手があげられる。約2トンの重さがある神輿は1回70人、交代人員を含めて150人の輿丁が必要とされており、紹介制で参加を受け入れている。他に、ボランティアという参加形態がある。ダストバスターズは天神祭での清掃ボランティア集団であり、毎年500名が氏地外か

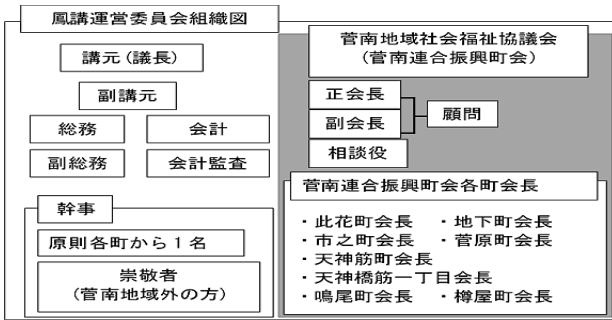


図4 鳳講運営委員会組織図

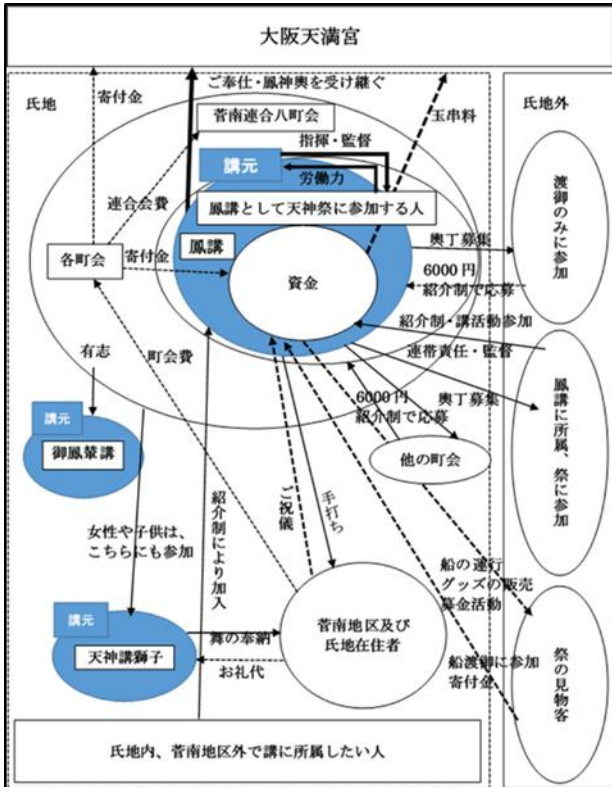


図5 鳳講における大阪天満宮及び氏地内・外との関わり

ら参加している。継続的に、祭事・神事の両面から天神祭に関わりたい場合は、講に所属することが必要である。同業者の縁・社縁を基に結束した講は、講員が氏地外在住者を含み大阪全体に広がっている場合も多く、同業種のつながりがあれば所属しやすい。鳳講の場合は、地縁の講ではあるが紹介者が監督し、連帯責任を負うという形で鳳講運営委員会の承認を経れば講員となることができる。

(4) 講以外の組織

講以外の天神祭を支える組織に天神祭渡御行事保存協賛会がある。天神祭渡御行事保存協賛会が天神祭の主催者とされており、現在会長は大阪商工会議所の会頭を務めている。天神祭の予算はこの教会の予算が担っている。大阪天満宮職員は、天神祭渡御行事保存協賛会の事務職員であり、天神祭当日は神事・サポーター・責任者の3役を果たす。

(5) 現状と課題

菅南地区は世帯数、人口ともに年々増加傾向にある一方、講員数は増加していない。移住者に対し、旧町名のコミュ

ニティや講の存在の知名度を上げると同時に、古くからの家筋でなくても加入できることをアピールし、新規講員獲得に繋げることが今後の課題となる。鳳講の講員のうち、若い講員は昇き手役員であることが多く、今後講の運営に携わる役員や、講元となるリーダー育成が必要だ。地縁の講全体としては、講の引継ぎ手として氏地外からの加入希望者を受け入れる場合に、合意形成について話し合いを進めるべきだ。地縁の基盤となる旧町名の引継ぎも重要である。一方、社縁の講は氏地外居住者や女性も参加しやすく、人手も多いが講の歴史や奉仕内容、講員として活動に参加する人数は少ないなどの課題がある。

5. おわりに

天神祭により地域に一体感が生まれ、地縁コミュニティが継承されていた。祭の存続には、今後影響の薄い大阪天満宮北部・堂島・千代崎での祝祭空間の演出と、積極的な祭への参画等を促し、天神祭を支える組織の増加・強化が必要である。また、天神祭予算の財源確保のため2年前から実施されているクラウドファンディングなど一般の人が個人的に寄付できる仕組みの拡充、ボランティアの受け入れ体制が重要となる。講に関しては、新規講員の獲得や、運営に携わる講員の育成、氏地外参加希望者に関する合意形成、旧町名の引継ぎが講という組織によって天神祭を支えていくうえで必要であると考えられる。

6. 謝辞

本研究の遂行に際し、本学会関西支部 2015-2016 年度「都市計画研究会(そらみつ)」の京都大学神吉紀世子教授、関西大学岡絵理子教授、他研究会メンバーに御助力頂きました。鳳講・講元の宮本善樹氏、大阪あそ歩ガイドの藤堂千代子氏には現地調査とヒアリング調査にご協力頂いたこと、大阪天満宮祭儀部長禰宜・柳野等氏、大阪天満宮文化研究所研究員・近江晴子先生のご助言に対し、謝意を表します。

引用・参考文献

- 1) 藍谷鋼一郎・有馬隆文・高山達也・松山加菜子(2012)「四都市における阿波踊りの比較から見た空間利用と運営方法の特徴と課題—徳島、高円寺、南越谷、大和をケーススタディとして—」、『日本都市計画学会論文集』47(3):589-594
- 2) 藤井基弘・深町加津枝・森本幸裕・奥敬一(2012)「伝統行事「京都五山送り火」の形態と祭祀組織に関する研究」、『ランドスケープ研究』75(5):587-592
- 3) 高島幸次(2001)「天神祭の成立と発展」大阪天満宮文化研究所編、『火と水の都市祭礼 天神祭』66-77, 思文閣出版
- 4) 近江晴子(2010)「なにわ・大阪文化遺産学叢書 14 大阪天満宮 天神祭(夏大祭)と流鏝馬式(秋大祭)史料 慶応元年～明治二十年」, 関西大学 なにわ・大阪文化遺産研究センター, 374-377・384
- 5) 藤里好古(1933)『上方叢書第壹篇 大阪夏祭 提灯考』上方郷土研究会
- 6) 近江晴子(1999)「大阪天満宮の講について—享保九年～慶応二年—」, 大阪市史編纂所編、『大阪の歴史』(54):29-52